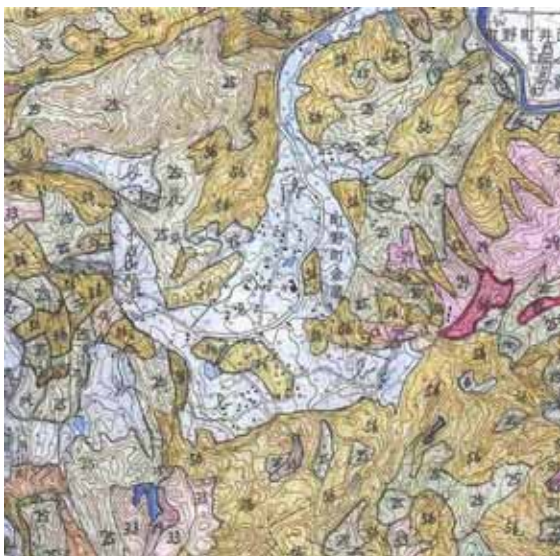


事例 No.1 輪島市町野町金蔵

1. 地域の概況（基礎データ）

範囲・位置	範囲	・石川県輪島市町野町金蔵地区														
	位置	能登半島北部・輪島市の北端に位置 ・金沢市中心部から直線距離で約 100km、車で約 2 時間 ・能登空港から直線距離で約 16km、車で約 20 分 図 金蔵の位置														
自然条件	地形・水系	3つの山に囲まれた盆地 ・天笠山、たかつぼり山、金蔵山という 3 つの山に囲まれた小さな盆地に位置しており、大きな川もないため、かつては水に不自由していた。 ・現在は保生池と呼ばれるため池を水源とし、さらに保生池からの水をためるため池が集落内に複数存在する。 ・金蔵の集落からは四方に向かう道があり、古くからこの地域の中心集落であった。 図 金蔵周辺の地形														
	植生	水田の周囲を二次林・人工林が取り囲むモザイク状の植生を呈している。 ・盆地に水田があり、それを取り囲む斜面は主にスギ・ヒノキ林、コナラ林等からなっている。  <table><tr><th>番号</th><th>植生</th></tr><tr><td>25</td><td>ユキグニミツパツツジ・コナラ群集</td></tr><tr><td>29</td><td>落葉広葉低木群落</td></tr><tr><td>56</td><td>スギ・ヒノキ・サワラ植林</td></tr><tr><td>66</td><td>マダケ・ハチク林</td></tr><tr><td>a</td><td>畑雑草群落</td></tr><tr><td>b</td><td>水田雑草群落</td></tr></table> 図 金蔵の植生（出典：第 3 回自然環境保全基礎調査）	番号	植生	25	ユキグニミツパツツジ・コナラ群集	29	落葉広葉低木群落	56	スギ・ヒノキ・サワラ植林	66	マダケ・ハチク林	a	畑雑草群落	b	水田雑草群落
番号	植生															
25	ユキグニミツパツツジ・コナラ群集															
29	落葉広葉低木群落															
56	スギ・ヒノキ・サワラ植林															
66	マダケ・ハチク林															
a	畑雑草群落															
b	水田雑草群落															

社会条件	土地利用	古くからの農山村の土地利用・景観が継承されている ・盆地に水田と集落があり、その周囲を二次林や人工林が取り囲むという、古くからの農山村の土地利用・景観が継承されている。 ・かつて地域の交通の要衝・中心集落であった頃の名残として、今日も小さな集落に5つもの寺が点在する。
	人口	かつては豊かで大きな集落であったが、現在は人口が減少している ・多いときで104戸あったが、昭和の時代から現在までに過疎化が進み、63戸（167人）まで減少した。集落景観を形成している住居も現在は36%が空き家である。 ・65歳以上の住民が52.7%を占め、高齢化が進んでいる。
	産業	農林業が衰退し担い手の高齢化が進んでいる ・人口は減少する一方であり、農林業の担い手不足は深刻である。 ・水田は台帳上では36haあるが、実際に耕作されているのは26haである。
	歴史・文化	お寺を中心とする地域の中心集落として古くから栄えた ・集落の始まりは、岩倉山金蔵寺を中心として栄えた寺莊園である。室町期の金蔵は奥能登の千石在所の一つであり、仏教田であったため、厳しい年貢の取り立てからも逃れることができ、お寺を中心として栄えた。 ・室町時代には畠山氏によって全村焼き討ちされたが、その後もかつての豊かさが忘れられず、お寺とその門徒を呼び込み再興した。 ・明治初期には金蔵の集落一つで小学校、郵便局が設置されるなど、地域の中心集落として栄えた。 ・山に囲まれたその地勢から水には不自由していたが、これを解決するため、明治期には高い土木技術を活かして、保生池（ため池）とそれに繋がる隧道を完成させた。また、同時期に金蔵の集落一つで小学校や郵便局が建設された。 「交流」に基づく伝統的な仕組みにより集落が維持されてきた ・室町期に全村焼き討ちを受けた後、集落を再興するために、外部からお寺を呼び込んだ。お寺を呼び込む際には、各お寺と檀家との結びつきも維持するようにした。檀家との繋がりを維持することで、金蔵の集落の人口が少なくても、定期的なお講の際には各檀家が金蔵の集落に集まるため、その交流人口を利用して集落を維持し、地域の中心集落となるまで再興された。現在の金蔵五ヶ寺には600もの檀家があり、この檀家を12組に分けて、月1回のお講の当番にしている。 ・古くから同じ水系を共有して生活していたため、住民達には一体感があり、集落内の事は常に一体となって行ってきた。明治期には集落の重要な水源となる保生池と、そこからの水を承る11の池が造られたが、この事業も集落の住民で均等に負担して行った。また、どれか一つでも池が損傷すれば集落の住民が一体となって補修を行った。集落内の水道整備の際も、その費用は集落内で均等に負担した。 ・金蔵の集落の内部では住民が一体となり、集落の維持のための負担も均等に分かち合ってきた。一方で、複数のお寺を呼び込み、外部との多数の交流人口を有することで、集落内の人口が減少しても集落を維持することができた。内部の結束力と外部との交流が金蔵の集落を繁栄させてきたと言える。

2. 地域における里地里山の保全・活用の取組

～「金蔵学校」を中心とした村おこしの取組～

1) 取組の実施主体・体制

金蔵地区では、地元住民が中心となって結成された「金蔵学校」が主な活動を行っており、研究機関である金沢大学とも連携している。金蔵学校は、かつて金蔵にあった小学校がなくなった時に、その大事さに気づき、「金蔵学校」という名で活動を開始し、村おこしに専念している。

以下では金蔵学校と、金蔵における金沢大学の取組について記述する。

地元住民を中心とした活動のポイント

担い手確保へ向けた村おこし

- ・集落の人口が減少しているため、まずは村おこしにより人を呼び込む必要がある。定住者が現れることが望ましいが、流動人口だけでも増加すれば、当面は集落を維持することができる。
- ・外から人を呼び込むために、金蔵を「やすらぎの里」として整備を進め、外部からの来訪者の受入体制を整えた。
- ・金蔵の住民は、これまでの歴史でも常に集落で一体となって動いてきた。人口の少なくなった現在においても、そのような金蔵の住民の気質から、集落を挙げての村おこしを行っている。

金蔵の見直しと発信

- ・まず、金蔵を見直す活動から始め、自分達も金蔵の歴史や文化などを学びながら、外部に向けて発信している。

地元と研究機関による「民学連携」

- ・里地里山の保全においては、専門的な能力のある研究機関との連携が効果的だと考えられるが、地元と研究機関のパイプ役として金沢大学の里山駐村研究員制度がある。
- ・金蔵地区の自然環境に関する調査は、専門的な能力を持つ金沢大学を中心として行われている。



金蔵の棚田景観



正願寺（金蔵五ヶ寺の一つ）

2) 取組の経緯

- ・平成 9 年 地理的・文化的に金蔵の中心だった金蔵小学校が廃校となる。
- ・平成 12 年 「金蔵学校」を結成。
- ・平成 14 年 第 1 回 金蔵万燈会（かねくらまんとうえ）が開催される。
- ・平成 15 年 「NPO 法人 やすらぎの里 金蔵学校」となる。
- ・平成 17 年 金沢大学により「里山駐村研究員制度」が始まる。
- ・平成 18 年 金蔵自然文化研究所が開設される。
- ・平成 20 年 金沢大学と金蔵地区の共催で「金蔵里山コミュニティ交流会」が開催される。

3) 取組の目的・目標

金蔵学校は、里山保全・活用に関して、下記のような目的・目標を置いている。

目的 金蔵の再発見と新たな創出（集落の結束力を活かした村おこし）

- ・金蔵学校では「私が先生、あなたが先生」を基本方針とし、それぞれが持ち寄った思い、考えを述べることで歴史、文化、自然、社会、健康、生活を考察する。
- ・以下の 3 つの活動を掲げている。
 - 「やすらぎの里、金蔵」を発見：今に残る地名の由来・伝説を訪ねる。お宮、お寺の由来を訪ねる。
 - 「なつかしき、ふるさとの味」を各地に発信：金蔵産コシヒカリとすりわり汁、こげめしなど。
 - 「やすらぎの里、金蔵」を発信：四季折々の金蔵（集落、お寺の境内など）、山野草、花木を紹介。

目標 豊かだった頃の金蔵集落の再現

- ・担い手を確保して金蔵の集落として自立し、かつての極楽在所と呼ばれた豊かな金蔵集落を再現することを目標としている。

4) 取組の主な内容

金蔵学校による取組と、金沢大学の里山駐村研究員制度について以下に記述する。

やすらぎの里創り

【内容】

- ・前段階としてやすらぎの里創り構想とそのマップを作成し、金蔵集落の整備方針を確認。
- ・集落の各所に標柱・案内板を設置。
- ・集落の景観をより良くし、外部に向けてアピールするため、ツツジ千本運動が始められた。その後、ツツジ千本運動は桜千本運動に変わり、現在までに400本の桜が植えられた。
- ・金蔵地区の重要な水源であり、農村の生物の生育・生息場にもなっている保生池の周辺環境整備を行っている。
- ・金蔵の見所や五ヶ寺の紹介、散策のモデルコース等を掲載した金蔵散策絵図を作成。

【ねらい・ポイント等】

- ・やすらぎの里として集落を整備することで外部からの受入基盤ができる。
- ・桜千本運動は視覚的な効果があるため話題性があり、外部にむけた効果的なアピールに繋がる可能性がある。
- ・金蔵散策絵図は慶願寺にあるカフェ「木の音」にて無料で配布されており、来訪者が金蔵の歴史や伝説を感じ、また、理解しながら散策できるようになっている。



お寺の由来を紹介する看板

金蔵の歴史ほりおこし

【内容】

- ・神社・仏閣や地名の由来、金蔵に残る伝説と、その位置図を示したマップを作成。
- ・町野町金蔵に関係する年表を作成。古くは古墳時代後記からの金蔵の変遷をまとめた。
- ・金蔵の伝説を主題にした絵本を作成。
- ・金蔵にある各お寺の由来のしおりを作成。
- ・金蔵小学校のアルバム集をビデオに収録し、大正から平成までの入学式・卒業式の写真を収集・編集した、20世紀データブックを作成。

【ねらい・ポイント等】

- ・「歴史ほりおこし」を行うことで、まず、自分達が金蔵の良さを再発見、再認識することができる。自分達も金蔵に対する理解を進めながら、歴史、お寺、伝説といった金蔵を象徴するものを外部に向けて発信してきた。



金蔵寺（五ヶ寺の一つ）

- ・20 世紀データブックを作成することで、かつて地理的にも文化的にも金蔵の中心部に位置し、金蔵学校結成のきっかけにもなった金蔵小学校の歴史を記録として保存することができた。

特産物の開発・発信

【内容】

- ・金蔵産の米を付加価値米として販売。また、これとあわせて、金蔵の酒米から醸造した日本酒を「純米酒 米蔵金(まいぞうきん)」として発信。さらに、金蔵産の大豆と能登産天然塩、海洋深層水などを使った味噌の商品化も新たに進めている。
- ・金蔵産の米と米蔵金のセットや古代米とも組み合わせた金蔵の特産物として発売。



金蔵産のこしひかりと米蔵金

【ねらい・ポイント等】

- ・棚田は平場よりも耕作条件が悪く、管理に手間がかかるうえ、農家の高齢化も著しいため、ブランド化などの工夫をしなければ効果的に収益を上げることが困難である。
- ・棚田米をブランド化し、付加価値をつけて収益を上げることで、金蔵の集落の礎となってきた棚田の保全に繋がることが期待される。
- ・これらの特産品は金蔵万燈会の写真コンテストの商品などにも使用される。

オープンカフェ「木の音(こゑ)」

【内容】

- ・金沢大学の学生ボランティアの協力により、五ヶ寺の一つである慶願寺の渡り廊下を利用したオープンカフェを立ち上げた。
- ・古代米ケーキ＆コーヒー、金蔵野菜入りピザ、金蔵団子、金蔵団子ぜんざい、古代米入りアイスクリームといった、金蔵に関連しながらもカフェらしいメニューを作成。
- ・ギャラリースペースにて、能登島ガラス工房研究生による「ゆらぎ展」、パッチワーク展、金蔵万燈会写真展などの展示も実施。
- ・その他、月見茶会、月見茶会俳句展、古布切れによる布ぞうり教室といったイベントも開催。
- ・金蔵の特産品のひとつであるもち米から 16 種の切り餅、かき餅を作成し、「黄金もち」の名で発信している。



慶願寺の渡り廊下にあるカフェ「木の音」

【ねらい・ポイント等】

- ・金蔵の象徴であるお寺の境内で喫茶を楽しむことができ、また、境内の四季折々の景色を楽しむこともできる。
- ・イベントも行われるため、参加者の交流の拠点にもなる。
- ・特産品の商品化により、新たな外部へのアピールへも繋がる。

一粒のともしび「金蔵万燈会」

【内容】

- ・廃品回収ワンカップによるロウソクともしびを、五ヶ寺の境内、棚田の畦道、各民家などに約3万本設置。幻想的な雰囲気が醸し出される。
- ・室町期に畠山氏の焼き討ちに逢い、五ヶ寺を中心に再興した歴史と先人を偲ぶ催しである。
- ・同時に「ともしびアート」や「金蔵音頭」の披露、写真コンテストなども開催され、地元住民による売店もあり、賑わっている。



金蔵万燈会の様子

【ねらい・ポイント等】

- ・3万本のロウソクが燈された集落は幻想的な雰囲気となり、多くの観光客が訪れる。年間で金蔵の集落が最も賑やかになるのがこのイベントである。
- ・平成14年に始まったが、金蔵の歴史を元にした新たな「祭」となっている。

金沢大学による里山駐村研究員制度

【内容】

- ・里山保全や地域の活性化などに取り組んでいる人を「里山駐村研究員」「里山客員研究員・客員調査員」に委嘱する。
- ・大学の里山研究に民間の力を加える「民学連携」の新しい試みとしてスタートし、現在は42人の里山駐村研究員が委嘱されている。
- ・研究員は、地域の里山活動に関する情報提供や大学への提言、研究者との意見交換など、大学と連携した活動を展開する。
- ・地域の要望や提案を集め、大学の研究活動に活かすための「情報収集」、大学が蓄積してきた研究成果を地域に活かすための「情報発信」、さらに、里山連携を軸とした民学連携の理念や方向性について理解を深め、地域振興、里山研究の活性化を目指す「勉強会」の3つを軸にしている。



里山駐村研究員の委嘱状況

【ねらい・ポイント等】

- ・地元の人に研究員になってもらい、長年培った経験と知恵を大学の里山研究に活かしてもらおうのが狙いである。
- ・長年にわたって里山の保全や活性化に取り組んできた人たちで構成されており、地元の製材業者、木竹炭生産者、農産加工業者、「農家レストラン」経営者、草木染作家、天然塩生産者、山岳ガイド、介護ボランティア、郷土史家など幅広い「地域の専門家」が集う。
- ・「共同調査・研究」で大学が地域と連携し、地域の活性化を目指し、共同研究から、里山の資源を利用した新しい産業を創出することも目標の一つである。「産業=ビジネスモデルの提示」をすることで、産業振興や過疎問題などの地域課題に、解決の道筋を付けて行きたいと考えている。
- ・金蔵地区においても、地元の郷土史家が駐村研究員となっている。

里山里海健康診断調査・金蔵自然文化研究所

- ・奥能登地域の里山・里海において、金沢大学が中心となり、「里山里海健康診断調査」と称した自然環境調査を実施。
- ・金蔵地区においても調査が行われている。
- ・金蔵地区の民家を借り、金蔵学校と金沢大学の共同で「金蔵自然文化研究所」が開設された。金沢大学の学生・研究者をはじめ、国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニットの研究者スタッフの宿泊場所になるなど、研究活動の拠点の役割を担っている。



金蔵自然文化研究所

3 . 取組による成果

1) 里地里山の土地利用・管理の効用

自然の恵みとそれに根ざす生業・生活・文化が今日まで継承されている

- ・面積は減少しているものの水田耕作が継承されており、古くからの農山村の土地利用・景観・生活が継承されている。
- ・金蔵の歴史・文化を物語るものとして、寺院などの建造物や、伝説などの無形の遺産が今日まで引き継がれている。
- ・長年の水田耕作を通じて、水辺の豊かな生物相が今日まで引き継がれている、
- ・上記のような固有の歴史・文化と豊かな自然を有することから、金蔵は様々な分野の研究フィールドとされており、多数の研究者等が調査・研究に訪れている。

金蔵における生物多様性に係る状況

- ・集落の水源となっている保生池には毎年、オシドリが群れで飛来する。
- ・地区内に散在するため池の多くでクロサンショウウオ・モリアオガエルの産卵が確認されている。
- ・シダ植物以上の維管束植物 579 種の分布が確認されている。
- ・石川県版 RDB 記載種として、水辺ではミズオオバコ、サンショウモ、キクモなどが、谷あいではコケイラン、ヒトツボクロ、キヨスミヒメワラビ、カラタチバナ、エビネ、ナツエビネなどが確認されている。
- ・金蔵で確認された帰化植物は 46 種、全体の 7.9% であり、帰化率は石川県の 8.5%、金沢市の 9.1% に比べてやや低い。

近年の里山管理の取組を通じて、再生又は新たに獲得された効用がある

- ・やすらぎの里創りによる集落内の整備、金蔵散策絵図の作成、カフェ「木の音」のオープンなど外部からの来訪者を受入れる体制が整備されてきた。その結果として、人口 180 人程の集落に年間 8,000 人も観光客が訪れるようになり、交流人口は以前の何倍にも増加している。
- ・「こしひかり金蔵米」「米蔵金」「黄金もち」とった棚田米のブランドができ、金蔵集落の礎である棚田の保全に向けて前進している。
- ・金沢大学との連携、金蔵自然文化研究所の開設、国連大学高等研究所の「いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット」との連携により、多様な分野からの金蔵の里山の調査研究・映像作品の作成による情報発信等が進められている。

表 金蔵における里地里山の土地利用・管理の主な効用

項目	過去からの土地利用・管理で培われてきた効用	近年の取組を通じて再生・獲得された効用
1. 生物多様性保全（生物種・生息環境・土地利用）	・水辺の豊かな生物相が今日まで引き継がれている。	・オシドリが飛来する保生池周辺が禁猟区に指定される。
2. 資源の持続的利用・生態系サービス（水・食料・生産物・気象・土壌・エネルギー・廃棄物・CO ₂ ）	・水田耕作が継続され、稲作が行われている。	・「こしひかり金蔵米」「米蔵金」「黄金もち」といった棚田米のブランド化により、付加価値向上が図られている。
3. 人間の福利への貢献（人口増減・平均寿命・健康度・幸福度・郷土意識・相互扶助・快適性・自然認識）	・古くからの農山村の土地利用・景観が継承されている。	・外部からの来訪者を受入れる体制が整備され、流動人口が増加している。
4. 歴史・文化の継承	・金蔵の歴史・文化を物語るものとして、寺院などの建造物や、伝説などの無形の遺産が今日まで引き継がれている。	・地域の取組や大学等との連携により、金蔵固有の歴史・文化の発掘・調査研究が行われ、外部にも広くアピールされている。

2) 外部評価

伝統的な里地里山の景観とそれを活かす取組に対する評価

金蔵地区としての評価

- ・やすらぎの里として整備が進められてきた金蔵地区は、平成 16 年 12 月に「輪島・金蔵五ヶ寺を巡るみち」として「美しい日本の歩きたくなるみち 500 選（日本ウォーキング協会）」に選定された。
- ・平成 21 年 1 月には、一向宗の里を感じさせる景観や、地域おこしのグループの活発な活動、金沢大学などの里山研究グループの受入等が評価され、「にほんの里 100 選」（朝日新聞社、日本森林文化協会）に選定された。
- ・金沢大学の里山里海自然学校や国連大学高等研究所の「いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット」をはじめ、様々な研究機関が社会科学・自然科学の両分野で調査に訪れるなど、研究者から学術的にも高い評価を受けており、特に民俗学の分野では「民俗学を調べるならまず金蔵」と言われるほどの評価を受けている。
- ・平成 20 年 9 月、石川県と金沢大学などの招きで金蔵地区を視察に訪れた生物多様性条約事務局のアハメド・ジョグラフ事務局長は「人と自然、文化、農業、そして宗教が調和した、すばらしい里山」と感想を語った。

NPO 法人 やすらぎの里 金蔵学校の活動に対する評価

- ・平成 18 年度には、特産物の創出、地産地消、都市と農村の交流、環境保全といった活動が評価され、「豊かなむらづくり表彰事業（農林水産省）」において北陸農政局長賞を受賞。
- ・平成 20 年度には、有志グループを中心とした集落を巻き込んだ大きな動きや、地域資源である寺院を巻き込んだ能登ならではの地域づくりなどが評価され、「過疎地域自立活性化優良事例（総務省）」において総務大臣賞を受賞し、輪島市で開催された「全国過疎問題シンポジウム 2008 in いしかわ」にて表彰された。

5 . 今後の課題

交流人口を定住に結びつけるための受入態勢等の強化

- ・金蔵学校の活動により、金蔵における交流人口は明らかに増加しているが、定住人口の減少傾向は変わらない。担い手の確保のためには、外部へより効果的な発信をしていく必要がある。
- ・今後は「あなたのふるさと創り」オーナーを展開して外部との交流を深め、また、外部の力を借りてやすらぎの里創りを進めていくことを構想している。

オーナー制度や民泊による資金確保

- ・「こしひかり金蔵米」や「米蔵金」などにより、棚田の農産物をブランド化し、付加価値を高める努力をしているが、農業だけで自立するまでには至っていない。集落内で収益を挙げられるような産業の創出など、新たな仕組が必要とされる。
- ・金蔵地区は室町時代の趣きを残す集落景観が特徴的である。民家も集落景観の要素の一つであるが、現在は 20 戸以上が空き家となっている。今後はこれらの空き家を利用した民泊の展開も構想している。

固有の伝統・文化など金蔵が持つ魅力のさらなる調査・発信

- ・再三記載しているように、長い歴史のある金蔵の集落には金沢大学をはじめとして、様々な研究者が訪れ、「民俗学を調べるならまず金蔵」と言われるほどの評価を受けている。
- ・有識者から高い評価を受けるような歴史・文化は伝統的な生活文化の知恵や技術の継承という観点から、外部へ発信する価値があると言えるが、効果的に発信する方法が確立されておらず、模索中の状態である。
- ・また、言い伝えが多く残されていることが金蔵の一つの特徴として挙げられるが、この代々受け継がれてきた言い伝えも、集落の人口がこのまま減少すれば、失われてしまう可能性がある。